

蜂雜載

給なりとて、

我宿の汀に生るなよ竹のはちすとみゆるおりもありけり

〔嬉遊笑覽禽蟲〕蜂が刺たら子をとらうといふは、もと蜂吹なり、源氏風松大井も宿もりが體をいふ

處はな、ど打あかめつ、はちふきいへば、若菜の下にも、はちぶくと有抄に蜂の面近く飛時、恐

れてうそぶきするやうに物いふなり、物を聞いれず、一向にいひそくるを、蜂拂といふに似たり、

守武獨吟、辨慶や蜂のありともし、らざらんうそをもふかすけなげなるころ、

〔新撰字鏡蟲〕蛤蠅蠅四字同蠅也、蠅也、波戸、又桑虫、

〔倭名類聚抄蟲〕附 方言云、陳楚之間謂之蠅音齊、和名波閉、東齊之間謂之羊郭璞曰、蠅羊

〔箋注倭名類聚抄蟲〕說文蠅、營々青蠅蟲之大腹者、从隄虫、李時珍曰、蠅夏出冬蟄、喜煖惡寒、蒼者聲雄壯、負金者聲清括、青者糞能敗物、巨者首如火麻者、茅根所化、蠅聲在鼻而足喜交、

〔下學集上〕蠅氣形、蠅者、喻之、諷言者也、點、黑白、糞、玷、珠、玉、

〔八雲御抄蟲〕蠅 さはへなす 五月のはへとかけり わろき物也

〔東雅蟲〕蠅ハヘ 日神天磐屋戸に籠り給ひし時、萬神の聲如狹蠅鳴といふ事、舊事紀に見えし

を、古事記には、狹蠅那須としるし、又舊事紀には、天孫天降り給はむとし給ひしとき、此國に多に

道速振荒振神ありて、又磐根本株、草之垣葉、猶能言語、夜は螢火の如くにして、喧響、晝者如五月蠅

而沸騰としるされ、日本紀も舊事紀によられたり、ハへの義は不詳中略、凡そ蟲の名に、ハといふ

なり、中略、舊事古事日本紀等に見えし所に、據れば、ハハへとは其聲あるに因りて云ひし所に似たり、ハハイ中略

〔重修本草綱目啓蒙蟲〕蠅 ハヘ和名ハイ中略

蠅ハ皆三月土用ノ比ヨリ暖氣ヲ逐テ出、數種アリ、ソノ四五月ノ時、人家四邊ノ陽地ニ多ク集リ、

相追ヒテ飛ビ翔ルモノハ、蒼蠅ナリ、俗名クロバ、イ、色蒼黒ニシテ、大サ四分許、ソノ聲高シ、故ニ典籍

蠅